

(事後C)

評価委員会総合評価

研究課題名：B5 地殻変動観測による火山活動評価・予測の高度化に関する研究

評価委員

委員長：小泉尚嗣

委員：佐竹健治、関口渉次、泊次郎、渡辺秀文

評価年月日：平成 30 年 9 月 14 日

1. 総合評価

- ☐ 非常に優れた研究であった。
- ☒ 優れた研究であった。
- ☐ 研究を実施した意義はあった。
- ☐ 失敗であった。

2. 総合所見

本研究は、気象庁の噴火予警報業務に資するために、地殻変動観測による火山活動評価手法及び噴火に至る火山活動の推移想定の高度化を目的としている。

本研究により、国内外の火山を対象として地殻変動観測と解析を実施し、火山活動に伴う地殻変動からマグマ供給系解明に資する知見を取得した。特に、衛星データを活用した干渉 SAR 解析では、いくつかの火山で微小な地殻変動を高分解能で面的に検出し、火山監視手法としての有効性を確立した。このことは高く評価できる。また、様々な補正手法を開発し、火山活動に伴う微小な地殻変動を検出できるようになった。このことは、今後の火山監視能力を向上させるものである。さらに、近い将来の噴火が想定される伊豆大島で、通常期の各種変動のメカニズムの理解が進んでいることは、噴火の際に大いに役立つことと考えられるため、科学的な意義にとどまらず社会的にも意義のあることである。加えて、気象庁の各火山監視・警報センターが行っている噴火警戒レベルの判定基準精査及び噴火シナリオデータベース作成に協力し、気象庁業務の改善に貢献できたことも社会的に意義のあることと評価する。

一方、水蒸気噴火の予知・予測が非常に困難であることや噴火後の推移予測も困難であることは、本庁とも連携しつつ住民に周知しておく必要があると考える。住民に過剰な期待を与えないことは、必要とされる人材育成を長期に継続していくためにも重要なポイントと考えられるからである。また、研究の目標が「高度化」といった漠然としたものであり、より具体的な目標設定が必要であろう。

以上のことから、本研究は、概ね適切な目標設定と研究体制のもとに実施され、当初想定した成果が得られた優れた研究であったと評価する。